



友 Yu-Ai 愛

理事長: 立花志瑞雄

館長: マシュー・ベイトマン & マラカイ・ネルソン

〒733-0032 広島市西区東観音町8-10

TEL 082-503-3191 FAX 082-503-3179

Email: office@wfchiroshima.org Website: www.wfchiroshima.org



Facebook



<u>同じ空の下で</u> ジョアン・シムズ博士	2
<u>フレンズデー2022</u> マラカイ・ネルソン	3
<u>ウィルミントン大学平和資料センターにWFCから アーカイブ・ボランティアとして派遣</u> 服部淳子	4
<u>WFCでの夏を振り返って</u> エイジャ・ゴリデイ	7
<u>私がWFCで過ごした時間を振り返って</u> ローラ・ウエスファル	7
<u>インターンシップを通して学んだ私が知らなかった広島</u> 堀内勇斗	8
<u>インターンシップ</u> プリシリア・シスワント	9
<u>あらゆる面から学ぶ: WFCの2022年インターンシップを振り返って</u> マシュー・ベイトマン	10
<u>8月6日の集い</u> ロン・クライン、マラカイ・ネルソン	12
<u>マラカイの両親の訪問</u> マラカイ・ネルソン	13
<u>両親の来広と皆さんとの出会い</u> マシュー・ベイトマン	14
<u>ホリデーパーティーを振り返って</u> 関根和、マラカイ・ネルソン	16
<u>WFC Hiroshima をつ・た・え・る 基礎講座を振り返って</u> 立花志瑞雄	17
<u>アメリカオンラインPAX 2022春</u> 三村庸子	18



同じ空の下で

ジョアン・シムズ博士
(WFC元館長2011-2013年)

物心ついたときから、絵を描くことは私の人生の一部でした。大学では美術教育を専攻するつもりでしたが、土曜日の実技の授業は長時間行われていました。代わりに初等教育を専攻し、週末はパーティーや遊びのために取っておきました。大学卒業後は時々、子どもがまだとても小さい頃も、地域の絵画教室に通いました。

息子が3歳のときで昼寝をしているはずの間、私は絵を描くチャンスを見つけました。私は完全に集中していたので、イーゼルに絵を描いている台所に息子が忍び込んでいたのに気づきませんでした。私は松ぼっくりを描いており、影とハイライトを「ちょうどよい具合に」描こうとしていた時でした。突然イーゼルが倒れました。息子は静かに、イーゼルのボルトを固定しているナットをすべて緩めていたのです。そのとき私は、家族との生活が一段落するずっと先まで、絵を描くのはやめておかなければいけないと思ったのを覚えています。

私はその後も折に触れて絵を描き続け、特に空とその刻々と変化する質感を意識するようになりました。お気に入りの草原と美しい入道雲の絵を描き終え、脇に置きました。妻として、母として、英才教育の教師として、英才児と能力開発の教育カリキュラムの開発者として、そして博士号を取得するという目標を達成するために、私の人生はいっぱいで、余暇の少ないものになりました。そのような多忙な日々の中で、私は国家間の戦争が続いていること、そして人種、宗教、政治的な境界線に沿ったわが国で繰り広げられている戦いに、ますます心を痛めるようになりました。

平和に貢献し、多様性を尊重するために、たった一人の人間に何ができるだろうかと何度も自問しました。



ある夏の霧が出ている雨の日、私はシアトルで「サンブレイク」（雲間から太陽が顔を出す光景）と呼ばれるものを見上げました。私は再び、「平和を促進するために、一人の人間に何ができるだろうか？」と問いかけました。その答えはとても明確で、耳元に自分の声が答えました.....。「あなたは絵が描けるじゃない！」と。その日以来、私は平和に貢献することを目標に、「同じ空の下で」というシリーズを描き始めました。空には、国や政治、国籍、宗教といった人工的な境界線はありません。空を見上げると、果てしない美しさ、多様性、そして地球を包む真の愛の表現が見えてきます。私たちは皆、同じ空を共有しているのだと気づくことで、私の絵が、世界が協力と平和の愛を受け入れる一助になればと心の中で願っていました。



2010年、私はWFCのPAXメンバーに会いました。シアトル近郊にある我が家で彼らをもてなしました。彼らを広島と長崎の被爆者の話に興味を持ってくれそうなグループに紹介してほしいと頼まれました。私たちは彼らを小学校や高校に連れて行きました。私たちの友人で、第二次世界大戦中にアメリカ政府に強制収容された日系アメリカ人のヨシ・ナカガワさんを紹介しました。WFCからの訪問者は自分たちの話をし、ヨシは自分の話をしました。PAXメンバーたちはショックを受けました。戦争中、西海岸の日系アメリカ人に何が起こったのか、まったく知らなかったからでした。

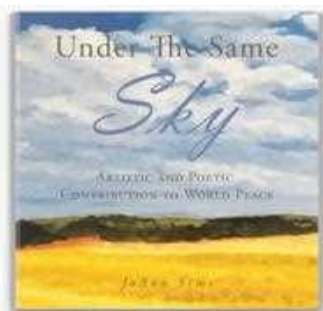
WFCのPAXメンバーは、草原と入道雲を描いた私の絵に感嘆の声を上げました。私は絵を通して平和を促すという個人的目標について語りました。この絵は彼らに贈呈し、今はWFCに飾られています。



館長になるためにWFCへ来たときは、川沿いにイーゼルを置いて絵を描くことを想像していました。実際には、一度も絵を描く時間はありませんでした。しかし、私たちは広島市がシュモアハウス（広島平和記念資料館附属展示施設）をオープンするのを手伝いました。私たちは、日系アメリカ人の物語や、フロイド・シュモアとエメリー・アンドリュース牧師による広島の家屋の再建を紹介するシンポジウムを1週間にわたって開催し、また、親友でミュージシャンのマイク・スターンを迎えて第1回「ヒロシマ・ワン・ワールド・ピース・コンサート」を開催しました。私たちは、日系アメリカ人の物語を伝える演劇作品「沈黙を破る」が広島で上演される道を開きました。私たちは、16人のPAXメンバーによる3週間のアメリカへのPAX派遣を計画し、指揮を取りました。また、私たちが館長を務めた期間中、世界中から1,800人ものゲストをお迎えしました。

コロナウイルスが世界を席卷し、WFCから初のオンラインPAXが企画されました。私は『Under the Same Sky（同じ空の下で）』の絵画作品群について20分間のプレゼンテーションを依頼されました。私はそれを承諾し、プログラム用に説明の台本を書きました。絵と詩的な言葉を披露した後、WFCの人たちが、私に自分の絵と詩の本を書くべきだと提案してくれました。私は出版社に連絡し、『同じ空の下で』という本が誕生しました。夫も私も、この本の収益をWFCに寄付することに同意しました。

私の絵が、美と刺激的な思考をもたらさんことを、そして空を国境で区切られることのない世界の多様性を、協力的で平和な愛のうちに包含するモデルとして見るよう、他の人たちを鼓舞することを願ってやみません。



フレンズデー2022

マラカイ・ネルソン

WFCは、他の団体もそうであるように、過去・現在・未来が（引っ張り合って）緊張を保っている。過去を忘れてしまえば、現在の活動に対する示唆を多く失うことになる。未来をないがしろにすると、自己中心的になってしまう。2021年初め、他界した理事の皆さんを追悼する日を設けようというアイデアが出された。2022年に入り、このアイデアはさらに練られて、WFCの創設者であるバーバラ・レイノルズを記念する内容も含まうということになった。そして2022年半ば、「バーバラの日」を真夏に開催することが決まった。WFCの歴史を思い起こし、祝う日である。

「バーバラの日」の企画委員会が結成された。山根美智子さん、茂津目恵さん、ジム・ロナルドさん、田城美怜さんとともに、私はこの委員会の一員になった。私たちはすぐに、イベント名を「フレンズデー」に変え、開催目的も、WFCの歴史を称える日とした。また一般の人々も広く参加できるイベントにしたかった。



このイベントの準備期間は、6週間強と比較的短かった。振り返れば、私はこの結果には満足している。

2022年7月2日、留学生会館のホールでWFCフレンズデーが初めて開催された。委員会の懸命な努力のおかげで、バーバラ・レイノルズとWFCの歴史を思い起こし、各英語クラスの皆さんや平和プログラムのリーダーたちから話を聞き、ピース・クワイアのメンバーと一緒に歌い、皆でいくつかのゲームをした。参加者一人ひとりが平和へのメッセージを付箋に書いて、イベントは終了した。地域の皆さんに告知する時間があまりなかったにもかかわらず、WFC外からも多くの人たちが参加してくれて、初めて、そういった人たちとの繋がりができた！



ウィルミントン大学平和資料センターにWFCからアーカイブ・ボランティアとして派遣

服部 淳子

2019年12月、標題の一般公募の広告をSNSで見た瞬間、第40代WFC館長であったバーブ・シェンクさんとダニー・オットーさんから以前ハチドリ舎でお聴きしたバーバラ・レイノルズさんの生涯と彼女が広島・長崎の資料等を寄贈し後世に遺した平和資料センターの印象深いお話が脳裏に浮かびました。

私はお二人からそのお話を聴いて以来、バーバラさんの想いを知りたい、機会があれば平和資料センター（PRC）を訪問したいと希望を抱いていました。

募集要項には、派遣目的と求める人物像（英語が理解できて、日本側（WFC）と密接に関連する文献資料等の調査ができる人）が書かれており、アーキビストではないのですが、20代の頃に図書館司書の勉強をしていたことからCVを提出、面接を経て、2020年春頃WFCから派遣されることになりました。

バーバラさんがPRCに寄贈した広島・長崎メモリアルコレクション資料と密接な関連のあるWFCのアーカイブについて、2020年1月立花志瑞雄さんから概略ご説明を受けました。資料の入った箱には、まるで真空パックのように当時の活動やバーバラさんと海外・日本人達とのやりとり、スタッフの想い等が凝縮されており、後世に伝えたい強い意志とそれに向き合う責任の重さをずしりと感じました。

その後派遣は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより長期延期となりましたが、2023年2月4日～3月2日ついに実現しました。

派遣は繰り返し行えるものではないので、ミッションやタスクに聞き漏れのないよう、渡航前の昨秋再度WFC（立花さん）とPRC（ターニャ・マウス現館長）の双方に確認しました。この派遣の目標は大きく分けて2つでした。

この記事を書いている今、私は2023年のフレンズデーの計画を練っている最中で、わくわくしている。昨年は試験的で興味深いものだったが、準備する時間が比較的少なかった。今年は、マシューさん、山根美智子さん、車地かほりさん、そして私が入念に計画を練り、昨年の成功を礎に実施したいと考えている。今年の「フレンズデー」の構成要素を考えるにあたり、過去に敬意を表し、現在を大切に、未来を見据えるというように、私は、今年のイベントがどのように、過去・現在・未来の張り具合を保持するのか見てみたいと思っている。



応援をどうぞよろしくお願いいたします。

WFCの平和活動は、皆さまからの会費と寄付、そして様々なボランティア活動によって支えられております。

<https://www.wfchiroshima.org/english/support-us/>





目標 1. WFCに関連するPRCの資料調査を行うこと（下記のタスク①～⑤による）

目標 2. WFCからウィルミントン大学附属施設に派遣された代表者として、PRCを通じて教職員から依頼された学生の授業や教職員との討論会に参加(タスク⑥)、学びに寄与すると共に架け橋の役割を果たすことでした。

タスクの詳細は、

① WFC設立初期の5年間の資料がWFCに無くPRCに保存されていると思われる。その内容を確認。

② WFC初代理事長の原田東岷先生が委員長を務められた「HAC（ヒロシマを知らせる委員会）」から、当時PRCで資料ボランティアをしていたバーバラさんの熱意に呼応して、1974年から10年間PRCに送られた図書・スライド・写真・フィルム等の現在の状態とその概要を英訳した資料が現存しているか確認。

③ WFCの翻訳グループから送った英訳資料は保存・活用されているか？

④ WFC設立直後9月から1カ月、バーバラさんが一時帰国した際の渡米後の様子が書かれた9月2日付の貴重な書簡の原本がWFCに無い。これはPRCに有るか？

⑤ PRCに保存されている森下弘先生（WFC名誉理事長）の資料内容を確認。特に先生が所蔵され、WFC-PRCの双方のアーカイブにもリンクするMorishita Papersとの資料の補完性、PRCにしか無い資料を確認することです。さらに今後可能であれば、未来世代の平和学習に活用できる資料を見つけ、教材の可能性を考えてみることでした。

お蔭様で、パンデミックで仕事や介護環境の激変等を経ながらも、ついにこの重要な派遣が実現し、毎日バーバラさんの息遣いが感じられるPRCで、ターニャさんやオンラインで立花さんのご協力を得ながら、日々精一杯ミッションの達成に努めました。

上記のうち寄贈資料のPRCにおける保存状態は、バーバラさんが生前書かれたのを後に拝見したとおり、残念ながら寄贈された当初から良くありませんでした。

現館長のターニャさんは、2015年の着任以来、寄贈資料の保存の改善と分類整理に特に努めて来られましたが、その2年後から同大学のQHC（クエーカーズ・ヘリテージ・センター）館長も兼任となり、私の滞在中、QHC寄贈者の100年の家族史をキルトからたどる企画展（定期展の1つ）の準備と東アジアの近現代史の授業の多忙な合間を縫って、館長の責任として熱心にロフトで未整理資料から該当資料を探してくださいました。

しかし、③は継続探索中、②は私の滞在中、HACからの寄贈図書を含むPRCの全日本語図書の図書目録を作成・保管しているワトソン図書館にまず目録データを依頼した直後、同館が臨時休館となり、目録は司書の方の献身により入手できましたが、帰国後その目録とWFCに松原美代子さんが遺されたHACの寄贈目録と照合する等、日本での追加調査が必要になりました。

①、④、⑤は達成。

現地での作業開始にあたり、渡航前の再確認に続き、最新の追加タスク等についてお二人に確認し、PRCにしかない①～⑤のWFCに特に関係する資料については、ターニャさんの許可を得た上で私がPRCにてバックアップを兼ねる形でスキャンし、PRC・WFC間でクラウドを通じて内部共有させて頂くことになりました。

タスク⑥も達成できました。PRCを通じて教職員から依頼され、次の授業等に参加しました。社会学、国際政治学、世界の食料、作業療法士コース、ペブル・シアターでの演劇公演、ウィルミントン大学の教職員と地域の合同フォーラム「休眠中の研究者ソサエティ」での意見交換等です。社会派アーティストで教員のジェフ・ヘーゼルデン、写真家のブレイク・フレイズィアーとの貴重な交流の機会もありました。



滞在中、ターニャさんとご家族はもちろん、学長・多数の教職員の方々、チップ・マードックさんたち学内ダイバーシティ・スタッフ、PRC学生ボランティアの皆さん、CPTのリック・ポールハムスさん、ターニャさんと2019年長崎の被爆十字返還の際に広島（WFC）にも手作り人形を携えて同行された学内チャプレンのナンシー・マコーミックさんとご家族、地域のNGOやクエーカーの方たちに温かい御接待を受け、大変お世話になりました。深く感謝いたします。

最大の学びは、PRCでバーバラさんの膨大な資料に日々接することで、バーバラさんの被爆者に寄り添い、「一期一会が平和を築く」と確信して困難な状況にあっても常に祈り、活動を続けられたその情熱とスピリットをひしひしと感じられたことです。

学内と地域のクエーカーの人達の集まり（フレンズ・ミーティング）に招かれたことで、クエーカーとなったバーバラさんの黙想と祈りについても深くインスパイアされました。また、同大学の週末のスタディツアーにも参加を許され、国立地下鉄道自由センターやデイトンの国際平和ミュージアム、ボックスカーの実物も展示されている米空軍博物館の見学、学内外のトランスジェンダーの方たちとの交流、バーバラさんの旧宅外観の見学等いずれも深い学びになりました。

追加作業は継続中で、中国新聞記者の森田裕美さんからのご依頼を通して、被爆者の方々の生き様を後世に伝える貴重な資料保存活用の意識を啓発させていただき記事への情報提供もさせていただきます。

これらについて、また是非共有し、詳しくお話させて頂く機会があればと考えます。今後共、どうぞよろしくお願いいたします。



写真（左上から右下へ①PRC（平和資料センター）②PRC-WFC日米連携でお名前がわかったバーバラさんと映っている女性（広島の二井サワエさん）③PRCにて社会学基礎クラス④ウィルミントン大学のOT（作業療法士）クラス⑤PRC（2階の一部）⑥バーバラさんと家族が住まわれていた旧邸



WFCでの夏を振り返って エイジャ・ゴリデイ

私は、幼い頃から日本に行くことを夢見ていました。そして、ワールド・フレンドシップ・センター(WFC)で6週間インターンとして過ごしたで、その夢が叶いました。広島での生活で素晴らしかったことは、本当にささやかなことでした。例えば、畳の部屋に布団を敷いて寝たこと、セブンイレブンの電子レンジで弁当を温めてもらったこと、本通りのタイトーステーションでゲームをしたこと、また、夕暮れに原爆ドームの横を自転車で通り過ぎたことなどです。

WFCの皆さんがとても親切にしてくださり、私は外国人ですが、疎外感は一度も感じませんでした。平和団体の裏側を知りたいと思っていた私は、最初の数日間で、WFCにかかわる人たち全員が、自分たちの活動に大きな愛と敬意を抱いていることが分かりました。これは素晴らしいことだと思います。



私はWFCを通して、たくさんの行事やイベントに参加しました。平和公園ツアー、被爆樹木ツアー、平和人形作り、ピース・クワイア、平和祈念式典、“ヒロシマの孫たち”という劇の鑑賞、お茶席、などほかにも多数！その中でも、「被爆証言」は、参加することができて本当に幸運だったと思った体験です。被爆者の方々にお会いしたことで、私が今まで読んだすべての歴史関連の文章が生き生きとしたものとなり、彼らのお話は私の一部となりました。これはかけがえのない贈り物です。

WFCで過ごした時間は決して忘れません。ここで学んだ多くのこと、また、この体験で受け取った平和のメッセージを生涯伝え広げていこうと思います。

私がWFCで過ごした時間を振り返って ローラ・ウェスファル

物心ついた時から、日本へ行くことが私の夢でした。ワールド・フレンドシップ・センターのインターンシップに参加することにより、この夢を充実した形で実現できました。例えば宮島で神社を見たり、お好み焼きを食べるなど、自分がぜひ体験したいと夢に見ていたことを実際に体験できたことは、私にとって大きな喜びでした。このインターンシップでは、普段では絶対に見聞きしたり経験できないようなことを、実際に体験することができ、私にとって特に価値あるものになりました。私は日本でエキサイティングな経験をするこ、また、WFCでの活動に有意義に関わるという両方をすることができました。



ワールド・フレンドシップ・センターの皆さんは、自分たちの活動に深い情熱を持ち、私たちを歓迎してくださいました。平和活動の舞台裏を見る機会を得て、私たち自身のスキルを活かすこともできました。8月6日にはWFC主催の活動に参加できました。私は機関紙「友愛」のレイアウトやロゴの修正作業に取り組みました。これはグラフィックデザイナーとしてのスキルを活かすことができたので、私にとって素晴らしいプロジェクトでした。

皆さんがとても熱心に、私たちに広島を案内してくださったり、学びとなる様々な興味深い活動に参加させてくださったりしたことが、私にとってうれしい驚きでした。平和記念公園のツアーや広島市内にある被爆樹木ツアーなども学びの機会の一部でした。エイジャと私はなんと、素晴らしい方々から贈り物までいただきました。WFCの関係者からいただいた、全ての贈り物とご指導を忘れることはありません。これからも大切にしていきたいと思います。



個人的に最も印象に残っているのは、私たちに被爆体験を語ってくださった被爆者の方と直接お話をした時間でした。私は学校で何度か広島について勉強をされていて、あの悲劇のことをそれなりに理解していると思っていましたが、原爆の影響に真正面から向き合った人たちの話を聞いて、私は人とのつながりに代わる教室での教育などあり得ないと悟りました。私たちがお会いした被爆者の方たちは、生き延びてこられたというだけでなく、喜びをもって生き続けておられていると知ることができ、嬉しく思いました。被爆証言は今後とも決してなくならないでほしいWFCの活動です。

私は外国人として、WFCで疎外感を感じたことは一度もありませんでした。この体験は私にとって、日本についてもっと知り、忘れられない人々に出会えた素晴らしい機会となりました。WFCが発信する平和のメッセージに私は感銘を受け、WFCがこれからも活躍することを願っています。



インターンシップを通して学んだ 私が知らなかった広島

堀内勇斗

過去に訪れたゲストの住所やアドレス、連絡先、名前、国籍、コメントなどをデータ化する作業をした。この作業をしていく中でゲストがどのような気持ちでWFCに宿泊し、どのような印象を受け取ったのかを知ることができた。原爆の事実を他の国の教育ではされていない場合もあり、非常に驚いた。その後の実習ではWFCの2人の館長が主催する英語クラスや翻訳クラス、子ども（小学生から高校生）の英会話クラスに参加した。将来教員を目指している私にとっては非常にいい経験になった。英語を学習するだけではなく、英語を使って何を伝えていくか、英語をこの先どう活かしていくかが重要であることに気がついた。子ども向けの英会話クラスでは子どもの集中力が散漫しないようにどのような順番でレッスンを行うかをあらかじめ入念に組み立ててレッスンに挑んだ。通訳が必要な場合には、通訳を横でする場面もあった。

広島平和記念公園ツアーでは、私が高校生であった時と全く印象が異なった。というのも高校生の時は自発的ではなく、あくまで学校のプログラムとして行っていたからだ。しかしインターンシップで平和記念公園の歴史やバーバラ・レイノルズについての知識を少し学習して自発的に平和記念公園に行くことで捉え方や細部への関心が変わると思った。これは背景知識（言語教授法にあるトップダウンリーディングに類似する）があるから情報の読み取り方や細部への関心が変わるのだと考えた。このことから、背景知識を生徒にインプットさせたのちに読ませたり、聴かせたりする学習方法も効果的であり、教員になった際にはこの方法を活用したいと思った。

さらに被爆者の体験談を3人の方から聴くことができ、非常に良い機会になった。私の祖母の体験も共有することができ、今まで知らなかった事実や現実をたくさん知ることができた。その地に住んでいるから知っているのが当たり前ではなく、近いからこそ知らないこともたくさんあり、私自身の中の常識が覆されたように感じた。



被爆者の願い

私は実習中に被爆者の方たちから話を聴き、そして広島平和記念公園のツアーに参加した。被爆者である西田さんは生き残った身としてこの話を語り継いでいくことが自分の使命で、自分の役目だと仰っていた。私も私たちの世代そして私たちの次の世代に語り継いでいくためにインターンシップで学習した原爆の事実、広島歴史を語り継いでいく必要があると考えた。

まとめ

私はWFCのインターンシップに参加して、平和とは何か、私の身の回りにある当たり前とはなにかについて考える機会が増えた。

また経営的な観点からお金、物、人をマネジメントする中で最も難しいことは人を動かすことであり、人に動いてもらうためには信頼を得る必要があり、信頼されることも社会に出ると難しいことを知った。

さらに将来教員になるにあたって英語を使って何をするのか、英語をただ勉強するのではなく、英語がどのように自身の可能性を広げていくのかについて深く考えさせられた。被爆者の方々の願いや想いを私たちの次の世代に、そして世界へとつなげていくために私たちにできることから始めていくことが必要であると考えた。

インターンシップ プリシリア・シスワント

8月22日から9月15日まで、ほぼ1ヶ月間のインターンシップでの経験を紹介したいと思います。

インターンシップは初めてでしたし、この地域で生まれ育った多くの同級生に比べ、私は広島原爆についてよく知らなかったのが最初はとても不安でしたが、私が在学している広島女学院大学の授業で、WFCのウェブサイトを見て、WFCの歴史やWFCでどのようなイベントや活動をしているのかをより深く学びました。

インターンシップを始める前に、「フレンズデー」というイベントに参加する機会がありました。WFCは、私たちにイベントのバナーデザインを任せてくれ、その作業を私たちはインターンシップクラスの中で行いました。これは本当に楽しかったです。

イベントでは素晴らしい雰囲気を感じ、多くの新しい出会いもありました。ミニゲームをして楽しい時間を過ごし、団体に関係しておられる様々な人とも知り合いました。

インターンシップの中では、8月6日に広島で起こったことについて多くのことを学びました。当時、コロナウイルスが多くの活動に影響を及ぼしていたにもかかわらず、スタッフのサポートもあり、インターンシップの一部の仕事をオンラインでもすることができました。

機関紙「友愛」のデータ管理の手伝いをしましたが、これは私にとって新たなチャレンジでした。

被爆者の証言を聞くことで、人生の大切な人を失う恐怖など、当時の気持ちを理解することができました。恐ろしい思い出を語るのとは簡単なことではないとわかっています。だからこそ、被爆者の話を聞ける本当に貴重な機会をもてたことに感謝しています。

彼らの言葉で印象に残っているのは、自分たちの話を多くの人たち、特に若い人たちに覚えてほしいということでした。私もまた、自分の国の人々を含め、多くの人々と自分の経験を分かち合うことができると願っています。

原爆に関連したツアーもとても勉強になりました。私は過去に10回以上その場所に行ったことがありましたが、その背景にある歴史については知りませんでした。もうWFCのインターンではありませんが、今後のイベントにもぜひ参加したいです。

インターンシップを経験して一番良かったことは、今まで考えたこともなかったようなことを学ぶことができ、自分の知識が広がったことです。また、WFCのメンバーとも楽しい時間を過ごすことができ、毎日の終わりには、チェックインと振り返りの時間を持ちました。

私の英語が完璧でないにもかかわらず、皆さんいつも時間をかけて丁寧に説明してくれました。このような素晴らしい機会と友情を与えてくれたWFCの皆さんに感謝しています！



あらゆる面から学ぶ：WFCの2022年インターンシップを振り返って マシュー・ベイトマン

23年度を迎えるにあたり、WFCでマラカイと私がインターンを担当した最初の1年間で得た大きな成長と学びにさらに構築し、新しいインターンを迎えることを心待ちにしています。これは、私たちが育み、形成してきた理解の深さと人間関係についての振り返りです。インターン生たちにとっても、私たちのチームにとっても、互いに学び、発見を分かち合う旅でした。

イリノイ・ウェズリアン大学（IWU）のエイジャ・ゴリデイとローラ・ウェスファルとのプログラム当初は、皆にとって適応と学びの期間となりました。年齢差の少ないチームを管理するのは難しさがありましたが、成長と理解を育むやりがいのある経験でした。特に彼らのプロジェクトであった寄贈品やアート作品のラベル作りは、単なる作業ではなく、エイジャとローラとともに館長としてWFCの歴史と文化への理解を深める上で大きな役割を果たしました。

修道大学の堀内勇斗さんのインターンシップは、このプログラムの適応性を示す一例です。当初はWFCのビジネス面に重点を置いていましたが、被爆3世という彼の背景を反映するプログラムへ方向性が変わりました。この方向転換は、プログラムの柔軟性と、平和と歴史についてのより深く有意義な理解を育むために、インターンシップを個人により合わせたものにする事への取り組み方を表しています。

女学院大学のプリシリア（プリ）・シスワントとダヌシ（ダヌ）・タマンジャリーのインターンシップでは、このプログラムが多様な経験を提供することができるということを実証しました。特に、韓国PAXの話を中心に過去の機関誌「友愛」を見直し、カタログ化するという作業は、単に歴史を保存するだけでなく、それを今日の文脈に合わせ利用しやすくすることにありました。WFCの過去の活動を理解しようとする彼らの好奇心と熱心さは、現在進行中の活動にも新鮮な視点をもたらしてくれました。

このインターンシップ・プログラムは、単に専門性を高めるための土台というだけでなく、アメリカや日本だけでなく、インターン生それぞれの多様な文化や歴史をつなぐ架け橋でもあります。そこは、学びが従来の枠を超え、個人の成長とグローバルな理解の領域へと踏み込んでいく所です。被爆者の体験談は単なる過去の物語ではなく、未来への教訓であり、警告であり、インスピレーションです。これらの物語を若い世代と共有することは、単なる教育的取り組みではなく、紛争よりも平和を、無知よりも理解を大切に作る世界を育むための道徳的責務なのです。

豊かな歴史と活気ある文化を持つ広島市は、この学びの旅を豊かにする背景を提供してくれます。インターン生が広島を探索することは、社会的にも教育的にも、彼らの全体的な経験にとって、世界平和と文化交流への理解に文脈と深みを与える不可欠な要素となっています。

将来を見据えるとき、私たちの目標は、このプログラムを継続するだけでなく、その仕組みと効果をさらに良いものにしていくことです。インターン生の募集を広げることや、通年で実施することについて話し合いを進めています。この一歩は単なる拡大ではなく、インターン一人ずつを通してグローバル理解と平和を育む、という私たちのコミットメントを深めるための戦略的な一歩であると考えています。



インターンシップについて 担当教授からのコメント

私たちは、パンデミック以前の3年間、WFCに学生を送りました。彼らは毎回、核軍縮の重要性をより深く理解し、日本文化、そして世界の平和を促進するWFCの活動の大切さを知り戻ってきます。2017年のインターン生ジョージ・ブルームバーグは、平和の推進に関わり続け、米国でスピーキングツアーを行う平和使節団をイリノイ・ウェズリアン大学キャンパスに招きました。2019年のインターン生ナタリー・クカは、日本文化と関わり続け、2022年にJETプログラムのもと山口県の英語教師として日本に戻りました。2022年の2人のインターン生は、2年間のオンライン授業とパンデミックによる人との社会的交流の欠如が原因で自身の課題を持っていました。しかし、以前の年々と同じようにWFCでのインターンシップは、彼らの世界観の形成だけではなく、成熟したプロフェッショナルな若者としての成長につながりました。エイジャ・ゴリデイは平和公園のツアーについて、「非常に良いツアーで、記念碑についての背景など、説明文だけでは解り得ない情報を多く教えてくれました。もしあなたがいつか広島を訪れことがあるなら、WFCの平和公園ガイドを受けてください。すごく価値があります！」と書いています。ローラ・ウェストファルの被爆者の話を聴いた感想では、それが彼女にどれくらい影響を与えたかを表しています。「違いを話し、理解し合えることが平和を育む鍵です。古家さんは、会話と核軍縮が人類の生存に不可欠であると言われ、話を締めくくられました。私は、彼女の信念が非常に重要で正当なものだと考えます。彼女の話聞いたことを嬉しく思いますし、1945年8月6日以降、彼女の人生が良いものであったと知ることが出来て嬉しいです。」とローラは書いています。

WFCを通してできるこのような経験を、もっと多くの学生に経験してほしいと願っています！

- テディ・アモローザ教授

広島女学院大学のグローバルスタディーズ・イン・イングリッシュ(GSE)コースの授業の中で学生たちは多くの時間をかけて、重要なグローバルなトピックについて様々な視点から学んでいます。しかし、彼らはWFCでのインターンシップを通じて、小規模な団体がどのように平和を理解し、広めるために、実際行っている活動を垣間見ることで、実践による学びの貴重な機会を得ることができます。

過去2年間、学生たちはWFCでの活動から、新しい友人、新しいアイデア、そしておそらく最も重要なこととして、自分たちには地域社会やその枠組みを超えた場所で、行動を起こす力と可能性があるという感覚を持ち帰ってきました。

- ロバート・ドーマー准教授

インターンシップは異なる種類の教育体験です：教室で主に学ぶのではなく、経験を通じて学ぶ機会です。また、イマージブ（没入）型の経験でもあります：インターン生は短期間、彼らがインターンシップを行う団体の一部となります。インターンシップは他にもさまざまな役割を果たすこともあります。一部の企業にとって、インターンシップを受け入れることは将来の従業員を見つける良い方法でもあります。逆に、学生にとっては、人気のある企業などでインターンシップを得ることは、そこについて内から学ぶ機会となり、その企業に雇用されるステップになることもあります。

NPOであるワールド・フレンドシップ・センターが提供するインターンシップは、一般的にキャリア重視ではありませんが、一部の学生にとっては、平和関連のNPOで働くための最初の重要なステップとなりました。しかし多くの人にとって、WFCのインターンシップの魅力は、平和関連の事柄について学ぶ機会があるということと、他国の人々と出会い、英語で交流する機会があるということの2つです。

広島修道大学の学生にとって、インターンシップは学科コースとして構成されています。これには、インターンシップ前のビジネスマナーやコミュニケーションスキルに関する授業、約10日間のインターンシップ、インターンシップ後の振り返りと報告書作成と発表の準備に関する指導のための授業、そしてこれらの報告書の提出または発表が含まれます。

- ジェームス・ロナルド教授



8月6日の集い

ロン・クライン、マラカイ・ネルソン

ワールド・フレンドシップ・センター(WFC)では去年に引き続き、広島からのオンライン(Zoom)イベントを通じて「被爆者の平和メッセージ」を世界中の人たちに届けました。昨年のコロナウイルスパンデミックの際に始めたこのオンラインイベントは、8月6日に広島で起こったことについて、より多くの人々に知っていただくためでした。今年は約50名が参加してくださいました。

約1時間のイベントでは、まずWFC館長のマシュー・ベイトマンが「一期一会で平和を築く」というモットーを軸に、WFCとその使命について説明し、WFCのさまざまな活動について説明しました。続いてWFC理事の清水美喜子さんが、8月6日に広島で起こったことについて説明しました。その後、WFC館長のマラカイ・ネルソンが、被爆者の話を聞くことの重要性と、約60年にわたり広島を訪れるゲストに、被爆者と会い、話を聞く機会を提供してきたWFCの役割について説明しました。

今年は、田中稔子さんが被爆証言をしてくださいました。広島に原爆が投下されたとき、敏子さんは6歳でした。彼女は現在83歳。彼女の家族は、奇跡的に爆風を生き延びました。彼女は後に美術学校に進み、有名な七宝作家になりました。彼女が自分の体験を語り始めたのは70歳のときでした。

2007年以来、彼女はピースボートで4回の世界一周旅行をし、80カ国以上を訪れました。ウクライナ戦争やプーチン大統領による核兵器の使用示唆について、「核兵器による非人道的な悲劇を知っている被爆者としては、これはまったく受け入れられないことであり、強い怒りを感じます」と語りました。

彼女は、国連の核兵器禁止条約を推進するキャンペーンをICANが成功させたことについても話しました。そして、「いつの日か、核兵器のない世界に住み、私たちの未来の子供たちの頭上には、美しい青空が輝き続けることでしょう」と、感動的な言葉で話を締めくくりました。その後、敏子さんはオンライン参加者から寄せられた質問に答えました。

8月6日の集いは、休憩を挟んで、平和記念公園のバーバラの碑で続けられました。42人のWFC会員と一般参加者が集い、平和への思いを分かち合いました。広島コベントリー会のメンバー数人が平和の詩を朗読してくださり、渡辺朝香さんがWFCクワイアを率いて歌を披露してくださいました。

コロナウイルスの懸念から、灯籠流しは市職員が灯籠を川に放つだけにとどまりました。

肯定的な反応が寄せられたので、このオンラインイベントはWFCの年次のアウトリーチイベントになるかもしれません。





マラカイの両親の訪問

マラカイ・ネルソン

3月に、私は父ポールと彼の友人メグを広島に迎えるという素晴らしい機会に恵まれました。彼らは14日間日本を旅行していたので、広島には6日間しか滞在できませんでしたが、幸運なことに、私たちはその時間を最大限に楽しみました。

彼らがここにいる間に被爆者の証言を聞き、平和記念公園のガイドを受けることが私にはとても重要でした。WFCで証言してくださっている被爆者の西田吾郎さんと、WFCの献身的なスタッフの一人である美穂さんが、父とメグが証言を聞く時間を作ってくれたことに心から感謝しています。美穂さんと寿美子さんが、父とメグと私に平和記念公園のガイドをしてくれました。



私の大切な友人である木戸マサ子先生の家を訪問し、茶道を体験したり、一緒に音楽を演奏したり、先生のお兄さんのお店でお好み焼きを作ったりすることができました。

木戸先生から、父とメグと一緒に好み焼きを作る用意をしたと聞いたとき、「広島のお好み焼きは芸術だ！ どうして木戸先生は、私たちにお好み焼きを作らせてくれるのだろう？ 台無しにしてしまう！」と思ったのを覚えています。しかし、その不安は自分の胸だけに秘めて店に入ると、なんと私たちが作る好み焼きは、関西風好み焼きでした。ご存じない方もいるかと思いますが、関西風好み焼きと広島のお好み焼きには大きな違いがあります。

広島人は、広島のお好み焼きの方が、あらゆる面ではるかに優れていると胸を張って言うでしょう。そばやうどん、キャベツ、豚肉、エビ、卵、ネギが何層にも重なった、究極のお好み焼きなのです。

作り方を見たことがありますが、かなり複雑な工程が必要で、私たちが作ったら絶対に失敗すると思っていました！



しかし、関西風好み焼きは麺を土台のようにし、すべての具材を混ぜ合わせて作ることがわかり安心しました。私たちでも作ることができました！ 食べ終わる頃には、みんな笑いに溢れ、お腹もいっぱいになっていました。木戸先生のお兄さんの奥さんが好み焼きの準備を手伝ってくれました。彼女の指導と笑顔にとっても感謝しています。

別の日、父とメグと私は宮島に行きました。天気がとても良く、まだ桜は咲いていませんでしたが、つぼみの咲き始めをいくつか見ることができました。

父とメグと過ごした時間のハイライトのひとつは、WFCのクワイアと過ごした午後でした。歌と幸枝さんのハワイアンダンス、そしてみんなと一緒に食べて、と陽気な午後でした。父とメグは、古いWFCのギターで音楽を披露してくれました！ 私もうクレレで数曲伴奏をしました。充実した一日の終わりには毎晩、父とメグと私はAirB&Bに戻り、リラックスした会話を楽しみながら夜を過ごしました。私たちは、時間が過ぎるのが早すぎもせず、遅すぎもしないことに気づきました。短い時間でしたが、丁度良い時間の使い方ができました。広島駅で彼らを見送った後、私は彼らとの時間を振り返り始めました。



両親の来広と皆さんとの出会い マシュー・ベイトマン

私の両親の広島訪問は、私たちにとって特別な時間になりました。一緒にホリデーを過ごすことができ、また、私たちがしている仕事、私たちを支えてくれるWFCに関わる人たち、そしてこの地域の文化的な歴史を紹介することができたからです。

私の書いた記事より大事なこととして、私がこの記事を書いていることを母に伝えたとき、母から送られてきた文を紹介したいと思います：

「何を主に伝えたいの？ワールド・フレンドシップ・センターの観点から言うと、私たちは平和記念公園や被爆樹木のガイドツアー、被爆証言、平和資料館の音声ガイドを通して、深い学びを得ることができました。また、私たちは、みなさんからの信じられないほど温かい歓迎に感謝し、WFCの皆さんが平和のメッセージを広め、団体を前進させるために懸命に働いている姿に感心しました。最後に、私たちのために時間をつくり、自宅に招いてくださったり、どこかに連れて行ってくださった人たちの寛大なおもてなしに感謝しています」。

到着後、両親は部屋に荷物を置き、これから始まる冒険の日々に備えました。私たちが共に過ごす初日は、睡眠をとった後、平和公園内を歩きながら原爆ドームまで行き、その後、美怜さんと楽しい居酒屋で夕食をとりました。平和公園については、後日予定していたガイドツアーで説明があるので、私からは何も説明しなくなり、両親を少し困らせました。ガイドさんはいつも一生懸命ガイドをしてくださるので、そのツアーをフルに経験してほしかったのです！公園内を歩き、本通りを少し歩いた後、平和大通りのドリミネーションをセクションごとに見て回りました。各セクションはとてもユニークで、象徴的な光の城や、来場者が通り抜けることができ（そしてたくさんの写真を撮ることができる）、高波に乗る海賊船など、魅力的で美しいものがいくつかあった。しかしそれ以上に、シアトルでホリデーのイルミネーションを見る、という私の家族の伝統が思いがけず続けられていて、とても懐かしかったです。

WFCの若いプロフェッショナルであることは、いい意味で色々なチャレンジがあります。私は思慮深くWFCに奉仕するために自分の限界に挑戦していますが、それが十分でないと感じることも多いです。しかし、父とメグをWFCの多くのコミュニティー・メンバーに紹介できることを誇りに思いました。WFCの平和に向けた継続的な活動について2人と共有できたことも嬉しかったです。WFCは、私がプロフェッショナルとしてできることの幅を広げてくれました。それが、WFCの活動に少しでも貢献できたなら幸いです。父やメグと時間を共有したことで、自分に対する自信が深まりました。この自信が、ここでの館長としての役割を果たすためのより強い努力につながることを願っています。



最後に、私はWFCのメンバー全員が父とメグをもてなし、親切にしてくれたことに深く感動しました。私たち一人一人が、皆さんの配慮に信じられないほどの光栄と謙虚さを感じました。来年のいつか、母デニスを広島に迎え入れ、この素晴らしいコミュニティを紹介するのが待ち遠しいです。

この訪問を思い出深いものにしてくれたすべての人に感謝します。



翌日は、私が10年間待ち望んでいた目標、三滝寺と一緒に楽しむという日でした。2013年に初めて広島を訪れたとき、ジョアンとラリーにどうしても行くべき場所と言われて以来、三滝寺は自分にとって平和な「幸せの場所」として世界で最も好きな場所のひとつになりました。そしてついに両親にも三滝寺を紹介することができました。しかし、ここが鮮やかに真っ赤に染まる秋にまた来ないといけない、と両親には伝えました。



翌日、私たちは平和公園から高速船で宮島に渡り、ロープウェイで弥山に登り、もみじ谷公園まで歩いて戻りました。たいていの日は15,000歩近く歩きましたが、この日は18,164歩で最多でした！言うまでもなく、私の両親にお好み焼きを紹介するために本通り付近でマラカイと合流した頃には、すっかりお腹が空いていました。お互いに間接的にのみ知っていた両親とマラカイに、やっと出会うことができました。

私たちは新年を岩国への日帰り旅行で迎え、錦帯橋、吉香公園、岩国城を訪れました。橋に近づくにつれ、衣装に身を包み、背の高い旗を持って、橋を渡る行列を目にして驚きました。後に知ったのですが、それは岩国藩鉄砲隊保存会の人たちで、少し後に銃の発射音が聞こえました。



私たちにとっての絶対的なハイライトで、両親が期待していた以上の出来事は、木戸先生のお宅に招いていただき、茶道の体験ができたことでした。両親は、木戸先生の美しくデザインされた茶室、見事な生け花、そしてお茶を点てる全工程に感嘆しました。そして、各工程を説明してもらいながら、自分でお茶をたてるという体験もできました。それは楽しい挑戦であり、彼らにとってはまったく新しい体験でした。

WFCを訪れるなら、被爆証言を聴くことと平和公園のガイドツアーはもちろん欠かせません！ご自身のお父さんの体験と、彼自身がその歴史から学んだことについて、心動かされる話をしてくれた岡原民幸さんにとっても感謝しています。両親はドイツからの旅行者と一緒に話を聞かせてもらい、家族、旧友、新しい友人など、訪れた人たち一人一人と培いたいと願う体験の平和的側面について、意義深い話し合いをすることができました。

平和公園では、清水美喜子さんが快くツアーガイドを務めてくれ、両親のたくさんの「細かい」質問にも親切丁寧に答えてくれました。ツアーの最後には、おりづるタワーでコーヒーを飲みながら、そこにある多くの展示品を楽しみました。



両親は、高橋さんの案内で被爆樹木ツアーも体験しました。マラカイも私も、被爆樹木ツアーは広島の歴史を学ぶためのパワフルでユニークな方法だと感じていて、両親にとっても衝撃的でした。もちろん、広島城エリアの散策も楽しみました（両親は別の日にも広島城を訪れました）！この街の歴史に加え、両親がこの街で体験したもうひとつの衝撃は、皆さんから受けた絶大なおもてなしでした！



池田美穂さんは、今まで広島で見た中で一番素敵なお弁当を私たち全員に振る舞ってくれました。地元のいろいろな食べ物（ワラビは本当に美味しかった）をたくさん知ることができ、また、素晴らしい会話を通して、両親もオフィスチーム全体のイメージをもつことが出来ました。彼女の手作りのお雑煮は、新年のお祝いにぴったりでした！

滞在が終わりに近づいた頃、田口知鶴子さんが私たちを夕食に招いてくれました。母曰く、「今まで経験した中で最も美しく盛り付けられた食事」でした。色とりどりのごちそうで味も多様、千鶴子さんとご主人との楽しい会話もあり、素敵なお宅と伝統的な日本庭園を見学させていただきました。

両親の最後のツアーはWFCではなく三村庸子さんと、あの有名なニューヨーク近代美術館を設計した建築家が設計した中区の環境局中工場の見学でした。彼らはツアーとランチを楽しみましたが、この親切なご招待の伝え方について私は少し文句を言われました（「庸子さんがあなたたちを焼却場に連れて行きたいと言っている」と伝えたのは適切ではありませんでした）。

そしてもちろん、最後になりましたが、私たちは最後の目標を達成しました。私のクラスの生徒さんに会うということです。両親もやっとクラスの生徒さん一人一人に会うことが出来て本当に喜んでいました！両親は沢山の写真を撮り、自分たちの旅行の話を皆さんと共有しました。

この訪問を通して、両親と私は皆さんからの温かい歓迎、そして歴史的、文化的、社会的な活動を楽しみました。私たちが一緒に過ごした時間は、家族の伝統であるホリデーと一緒に祝う素晴らしい機会でしたが、それ以上にWFCの活動や地域社会との関わりを満喫することができました。また、私たちの仕事を両親と共有できたことを誇りに思います。

この経験を素晴らしいものにしてくださった皆さんに感謝します！

ホリデーパーティーを振り返って

関根和、マラカイ・ネルソン

12月にWFCホリデーパーティー2022が開催されました！WFCではこれまでもクリスマスパーティーを開催してきましたが、今回のパーティーの目的のひとつは、クリスマス以外の祝祭日もお祝いに加えることでした。そこで、会の初めにまずマシューと私が、ハヌカ、クリスマス、冬至、クワンザ、そして他行事など、冬のこの時期に様々な宗教や文化によって祝われる祝日について分かち合いました。

その後、WFCの各クラスや平和活動グループが、ダンスを披露したり、音楽を演奏したり、ゲームをしたり、思い出話をしたりしながら、この一年のことを発表しました。ピースクワイアはクリスマスキャロルを歌い、パーティーの最後には全員で記念写真を撮りました。

参加者は折り鶴を折ったり、アメリカや韓国の友人たちのホリデーの伝統について読んだりしながら、WFCの皆さんが作ってくれたクッキーとコーヒーを楽しみました。参加者の一人、関根さんがパーティーの感想を書いてくれました。

「クリスマス会の思い出」

ピースガイドとこどもの英会話からのご縁で、クリスマス会に誘っていただきました。こどもと初めて参加させていただきましたが、あたたかい雰囲気の中、美味しいコーヒーとクッキーですっかりリラックス。みなさんの愛のこもった手作りの出し物の数々に感動しました。みなさんとともに平和を願いながら、一年を振り返る素晴らしい一日の出来事は、娘とわたしにとってのいい思い出になりました。ありがとうございました。

皆さん、参加してくださりありがとうございました！





WFC Hiroshima をつ・た・え・る 基礎講座を振り返って

立花志瑞雄

2017年に始まった「WFC Hiroshima をつ・た・え・る 基礎講座」は、6年間にわたり、みなさんに原爆や平和について考える学びの場を提供してきました。途中、新型コロナウイルス感染拡大のために、中断を余儀なくされた時もありますが、オンラインで講座を実施するという新たな収穫もありました。そもそも、この基礎講座をスタートさせたのは、被爆者の方たちが高齢化するなかで、私たちが、どのように被爆者の方たちの核兵器廃絶、世界の恒久平和への思いを、被爆体験を聞き、原爆や平和について学び、次の世代に伝えるために、継承していくのかという課題に取り組むためでした。

新型コロナウイルスが流行するまでは、通年の講座として行い、会場のスペースの関係上、受講人数は限られ、受講者の延べ人数も数十人程度でした。2000年から単発の講座に切り替え、現在では、一度でも受講して下さった方の延べ人数は、300人を越えました。講師を務めて下さった方々は、延べ60組。被爆者、戦争の体験者、平和教育に携わった先生、文化芸術に携わる方、ジャーナリストの方、平和行政に携わった方、被爆体験の継承者、平和活動を実践している人、平和に関心を持って活動する高校生たち、様々な立場で活動をされている方たちから学んできました。時には現場に足を運び、フィールドワークを行いました（シュモアハウス、江波界限、平和公園、被爆樹木、広島城界限、旧陸軍被服支廠、比治山、似島、放射能影響研究所等）。



前回の報告以降、2022年、2023年、以下のような講座を企画しました。

- 4月「森下先生と“碑”を巡る」フィールドワーク 森下弘さん
- 5月フィールドワーク「被爆証言を聞く－梶矢文昭さん－」梶矢文昭さん
- 6月「世界の仲間と『核兵器禁止条約』で進もう」村松真澄さん（ピースボート）
- 7月「被爆証言を聞く－古家美智子さん－」古家美智子さん
- 9月「97歳が語るシベリア抑留－末広一郎さんのお話を聞く会」末広一郎さん
- 10月フィールドワーク「消えた町 記憶をたどり 森富茂雄さんの足どりをたどる」中川幹朗さん（ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会代表）
- 11月「原爆納骨安置所と佐伯敏子さん」中川幹朗さん（ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会代表）
- 12月「後世に伝えるために～世界平和を目指して身近な平和活動を～」広島女学院高校署名実行委員会の皆さん
- 1月「記憶と継承」平岡敬さん（元広島市長）
- 2月『グラウンド・ゼロを書く』とユネスコ「世界の記憶」成定薫さん(広島大学名誉教授/広島文学資料保全の会幹事)
- 3月「97歳が語る満州－末広一郎さんのお話を聞く会」末広一郎さん

参加して下さっている受講者の皆さん、スタッフ、WFC つ・た・え・る・プロジェクトのワーキングチームメンバーに感謝いたします。

講師の方々には、事前ミーティングや下見など、講座当日だけではなくご協力いただき感謝をしています。

被爆者の方たちの核兵器廃絶、平和への思いを引き継ぐために、これからも学びの場を企画していきたいと思えます。



アメリカオンラインPAX 2022春

三村庸子／アメリカPAX委員長

春のアメリカPAXをオンラインで、2月14日から17日（アメリカ時間13日から16日）の4日間開催しました。前半2日は西海岸と、後半の2日は東海岸と。

またそれぞれの第1日目は日本側から発信し、原爆の実相をPAX委員長の三村庸子が話したのち、西海岸からの参加者には被爆者の河野キヨミさんに、東海岸からの参加者には奥原民幸さんにお話をいただきました。お話を聞いた後質疑があり、その後、参加者が小さいグループに分かれ、日米で4・5人のグループで話をしました。日米それぞれのいろんなトピックが話されとても興味深いものでした。

西海岸・東海岸の第2日目には アメリカ側からのプレゼンがありました。西海岸からは、困窮する人達に関わって熱心にボランティア活動をしているグループ“Serving Those Around Us”と、反核の活動をしているシアトルの医師団“The Washington Physicians for Social Responsibility”からの発表がありました。東海岸からは、ウィルミントン大学のタニヤさんの紹介によるリックさんのお話とWFCの名誉理事でもある、ステイブ・リーパーさんのお話がありました。

リックさんは主にご自分がかかわっているパレスチナの話がされました。私は彼のスローガンである「平和を築く為に、一人一人の敵をも大切に」という言葉が非常に印象的でした。

リーパーさんからは、三次にあったお寺の鐘が、ジョージアに移設されたという興味深いお話がありました。またブラフトン大学のライオン&ラムのピースアートセンターからは沢山の学生が、質疑に参加してくれました。

アメリカ委員会の方々の多大な働きで、このPAXが成り立っているのを感謝と共に、痛感しました。また沢山の方が毎日このオンラインイベントに参加してくださったおかげでこのプログラムを成功裏に終わることが出来ました事、感謝に耐えません。本当に有難うございました。

最後になりましたが、PAXメンバーのマシュー館長・マラカイ館長・美怜さん・聡子さん・勝己さんにお礼を申し上げます。

またPAX委員会を代表しまして、ボランティアとして多大な働きをしてくださった恵さんに深くお礼を申し上げます。有難うございました。



2022年も多くの方々がボランティアとして様々な形でWFCを助けてくださいました。また、国内外の多くの方からご寄付もいただきました。心より感謝申し上げます。